

笑顔の寄付

港区立高松中学校 3年 細野 仁湖

先日、祖母の退院と少し遅れた誕生日をお祝いするため、私は家族と埼玉県に向かった。

祖母は「自己免疫肝炎」という難病を患っており、国の難病法に基づいて「難病医療費制度」の恩恵を受けている。祖母の手伝いのため、母は週に3日片道1時間半をかけて通い、週に3日ケアマネジャーさんや看護師さんに頼っている。祖母本人はもちろん、祖父や仕事で毎日手伝いに行くことが難しい母も彼らの存在にとっても助けられている。

介護用品のカタログを見てみると、歩行器や手すり、椅子など今の祖母に必要なものがたくさん載っていた。手すり13万8,700円、入浴用の椅子2万4,000円。私は、想像以上の金額に頭が真っ白になった。もちろん、介護に多くの費用が必要だということは理解していたつもりだが、治療以外にこんなにも必要だとは思ってもみなかった。そんな私の不安な気持ちに気づいたのか、ケアマネジャーさんが「医療費助成制度」について教えてくれた。難しい病気にかかっても、高額な医療費を支払えないがために、治療を断念する人も少なくないらしい。そのため、国や地方自治体が医療費を補助しているのだ。在宅医療や介護サービスの大部分も税金が支えている。祖母は実際に、全て一割負担で介護用品を購入、あるいはレンタルすることができていたのだ。

私にとって身近な税金は消費税だ。2019年に消費税が10パーセントに引き上げられたときは、正直不満だった。しかし、祖母の病気をきっかけに私たちが納めた税金が、医療や介護、福祉などの「社会保障費」に最も多く使われていることを知った。私たちが納めた税金で、祖母のように多くの患者さんが安心して治療を受け、笑って暮らしていると思うと、あたかも寄付をしているようで、納税という行為が誇らしく思えてきた。

「旅行に行きたい。」と祖母はよく口にする。「でも病気だから無理よね。」とも。税金のおかげで医療費の負担は大幅に減ったが、患者さんがやりたいことを諦めている現実はまだある。延命治療をベースとし、その先の誰もが主体的に生活を楽しむことができる社会、つまりクオリティ・オブ・ライフを高め自分らしく生きる社会を、私は作って行きたい。そしていつか、難病患者も宇宙旅行に行けるような、そんな世の中になってほしい。

私の夢は、心と身体のメンテナンスについて学び、プロアスリートから一般の人まで、治療を必要とする人を支えることだ。私の治療で、あと一步踏み出せない人の気持ちを後押しし、たくさんの笑顔を生み出したい。納税は「笑顔の寄付」だ。直接支えることができない遠くの人、名前や顔がわからない人も、納税という行為で笑顔にすることができる。納税を、たくさんの人を笑顔にする一つのツールとして人のために精一杯働く、そんな大人に私はなりたい。